

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

私的と公的のあいだ (私のスケッチ・ブック (12))

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005895

私的と公的のあいだ

国立民族学博物館 助教授

森 明子

□コインランドリーのある風景

コインランドリーのお世話になったことのある方は、少なくないだろう。下宿生活や旅先で重宝する。コインランドリーは、本来なら自宅にある洗濯機を、自宅の外で調達するための装置である。学生や独身者が住む町によく見られるのはそのためである。したがって、銭湯、弁当屋、クリーニング店、コンビニエンスストア、貸しビデオ屋などと相性がいい。

銭湯や弁当屋は、入浴や食事という本来自家で行われる日常的な人間の活動にかかわっていて、コインランドリーと同様、家内的なサービスを請け負うサービス業である。こうしたサービス業が並ぶ通りは、「横町」とか「路地」と呼ばれ、銀行やオフィスのショーウィンドウが並ぶ「大通り」とは異なる趣を見せる。

大通りは、画然と秩序づけられた空間である。車道と歩道は明確に区別され、信号が歩道橋を使わなければ道路の向こう側に行けない。道行く男女は身だしなみを整え、足元は革靴かハイヒールで固めている人が多い。それは「よそゆき」の空間である。

一方、路地をゆく人は、日常的な服装でスニーカーやつっかけの人が多し。歩行者と自転車が一見無秩序に通行し、と

きに自動車も混じる、といった具合だ。この日常的な生活感覚のたゞよう空間を、どうとらえればよいただろう。

大通りも路地も家の外にある「公道」であるが、空間としてのそれぞれの性格はまったく異なっている。前者は、見知らぬ人を前提とした、匿名的な空間であるのに対して、後者は、より家庭生活に近く、隣近所の見知った顔やなじみの店からなる空間である。ただし、二つの空間は同じ都市の中に共存し、しかも、ひじょうに近接したところに位置することがめずらしくない。ここでは、前者を「公的空間」、後者を「共的空間」と呼ぶことにしよう。

□共的空間

共的空間は、家庭内の私的な空間ではないが、かといって、公的な空間でもない。その中間の性格をもつ、共同性が息づく空間である。

思い起こしてみれば、近代世界は共同体を否定し、共同性からの脱皮をはかって成立した世界であった。近代化とは、(中世的な)共同体社会から(近代的な)市民社会への移行を意味する。先にあげた例で見れば、匿名的な大通りは近代的な都市のイメージと合致し、アパートや小店舗からなる「路地」は、前近代的な

イメージに近い。

しかし、人間の社会は断固として共同性を必要とする。なぜならば、人間は本来他者依存的であるためだ。そこで「近代」という理念が、共同性をおさめる場所としての共同体を否定したとしても、人間社会は、それにかわる共同性のおさめどころを、別の所に求める。

路地の復権は、現代世界において求められている共同性が、都市空間に顔をのぞかせた例といえる。近代化が驚進していた日本の1960年代、路地は次々に姿を消していった。だが、80年代ころからは、逆に路地を再評価する傾向が明らかになっている。

現代世界にあらわれた共的空間は、都市のエアポケットのような路地に見られる。それは、明確な境界線をもたない領域として、不定形に、臨機的に姿を見せる。たとえ安定的な場所ではないにしても、共的空間は存在しているし、さらに重要なのは、このような共的空間を措定してみると、公的か私的に区分することに慣らされている私たちの生活空間や活動は、ずっとゆったりしたものとして立ち現れてくるということである。

たとえば、「路地のそうじ」を考えてみよう。なぜ路地をそうじするのか？路地を公的空間と捉えるなら、その清潔の維持は「公衆道徳」に帰するほかはない。しかし、路地をそうじする心を子供たちに教えようとするとき、公衆道徳ということばでは、どうしてもちぐはぐする。路地をそうじし、そこに花の鉢を置いたり、縁台を置いたりしようとする心には、「ゴミはゴミ箱に」というような匿名的

でどこでも通用する道徳とは異なった、特定の親しみが込められているからである。路地と大通りを同じ言葉で語ることには、無理があるのだ。

この「共的」という考え方から、洗濯という活動をとらえなおしてみたい。

□洗濯という家事

洗濯という家事は、どういう空間に帰属するものだろうか。地方にいくと、かつてここで洗濯をしていたという川の一角を見ることがある。洗濯は、女性が井戸端や川のふちにしゃがんで行うのがふつうであった。それは、各家庭に帰属する仕事ではあったが、屋外で、しばしば近所の女たちが情報交換をしながら共にする仕事であった。このような洗濯場を、共的空間と呼ぶことができる。それは公的といいたいが、かといって私的でもない、そのあいだに位置する空間である。

ヨーロッパの洗濯においても同様だった。温湯を使う洗いの行程は、地下階などにつくった竈ばたで行ったが、すぎは屋外の共同洗濯場か、川辺で行われた。村のどの家の女性も、そこに洗濯物を運んで、さまざまな情報交換も行われた。その中には共同体の意思確認や、違反者に対する制裁も含まれていた。このような空間は共同体そのものである。共同洗濯場は、20世紀半ばを過ぎてもその機能を失わなかったが、水道がひかれ、洗濯機が各戸に導入されるようになると、姿を消していった。

同じことが都市においても見られた。都市には洗濯機が早くから導入されたが、それは集合住宅の地階に設置され、住人が共同で利用するものだった。洗濯機は



図1 庭のりんごの木に渡したロープにかけた洗濯物（オーストリア農村）

当初きわめて重かったので、階上にあげることは不可能だったからである。

都市における共同の洗濯場という共的空間は、農村と同様に、あるいはそれ以上長い間存在していたといえる。やがて洗濯機が軽量化し、各戸に普及することになって初めて、洗濯は隣人の目から隠れて家内で行われる家事になった。

平行して、クリーニング業という専門職が、都市で普及していったことも留意すべきである。もともと共的空間で行われていた洗濯という家事は、一部を外部化し、その残りを家内の私的空間に回収した。外部化した一部は、公的領域における位置づけを確立していく。クリーニング業は、共同性を排除して匿名的な人間関係を前提として成立した、近代の産業である。

□洗濯を干す空間

洗濯物を干すという行為は、広いオープン空間を占有するゆえに、洗う行為よりいっそう共的な性格を帯びやすい。それを端的に示すのが、ヨーロッパの伝統における大洗濯である。

20世紀初めのころまで、ドイツやフランスでは、シーツなどのリネン類は、年

に数回だけ行かう大洗濯の機会にまとめて洗った。その洗濯量はたいへんなもので、干すときは草地にじかに広げたり、柵にかけたりしたから、大洗濯のときは、白いリネンが見渡すほど広がるという景観があらわれた。その景観は、村の人々に一目瞭然となったが、実は家の主にとっては大きな意味があった。リネン類は、嫁入り道具でもある重要な財産で、世代を超えて受け継がれたから、多くのリネンを持つことは、それだけ多くの財があることを意味した。草地の上にひろがる白い洗濯物は、その家が豊かなことを、共同体の人々に示威したのである。

都市では、洗濯物を屋外に広げることはなかったが、集合住宅の屋根裏にあたる最上階が、洗濯物の干し場だった。住人たちは、当然相互にその洗濯物を目にした。屋根裏階のこの空間は、物干しを共有する集合住宅の住人の共的空間だったといえる。

しかし、現代のヨーロッパの都市において、洗濯物が隣人の目にふれることはない。洗濯物を干す場合、各家庭の内部で干すためである。折りたたみ式の、大ぶりのタオルかけのような器具が普及していて、それを必要なときに居間などに広げる。湿った洗濯物が乾くまでに、2～3日かかる。

集合住宅で洗濯物を干す場合、日本ではベランダに干すのがふつうであるが、ベランダに洗濯物をかけることは、景観を損なうという理由によって、ヨーロッパでは禁じられている。どうしても干す場合は、外から見えないように、手すりより下の低い高さで干す。

ヨーロッパでは、洗濯物を干すという行程において、かつては共的空間を構成していたものが、現代では徹底的に人の目から隠す、家内化、私秘化が進行しているのである。

これに対して、日本では、アパートやマンションのベランダに洗濯物を干すことは、現在もおお多く見られる。とはいえマンションの中には、ベランダの手すりよりも低い位置に、物干しを設定しているものが近年見られるようになってきたし、また乾燥機も、この数年のあいだにかなり普及してきた。日本でも、洗濯物を私的空間に回収しようとする意識が、ひろまりつつあることは事実だろう。

□共的空間と公私の再編

われわれの生活世界において、公的空間と私的空間を、より厳密に区別しようとする傾向はたしかにある。それは、一見秩序正しい世界をつくるものにみえる。ただし、そこで公私のあいだにあるあいまいな空間を、むりやりどちらかに回収してしまっていることに注意しよう。

洗濯や洗濯干しは、もともと公私のあいだの共的空間に位置する家事であったが、現代世界では私的空間に回収され、私秘化されつつある。

一方、日本にコインランドリーが町角にあらわれた経緯は、いったん家庭内に位置付けられた洗濯機が、家の外にあふれ出てきたものである。洗濯と平行して、ほかにも家内から外部化された活動がいくつもあり、それらとともに、都市の中にあたたかな共的空間が創造されつつある。このような状況は、家事サービスを自己充足できない独身世帯が増加し、その存

在を、社会が無視できなくなってきたことの一つのあらわれとして解釈することもできるだろう。

現代は、近代の個人主義の枠組みとともに確立された、公私の境界線の意味があらためて問い直され、編成しなおされている時代である。それは家庭という領域の再編成でもある。たとえば、料理の宅配、掃除や老人介護の代行などに、家内のサービスの一部が外部化されている現象を見出すことができる。その一方では、私的領域は外部者の視線から閉ざされて私秘化される傾向があり、家庭内で虐待が起こっても、外部からはまったく感知されないという状況も生じている。

私秘化のもたらす病的な事態を考え合わせるならば、共的領域を確保することは、意味あることに見えてくるのだ。たとえば、「物干し場」という空間を思い出してみればよい。テレビドラマや小説で、物干し場はしばしば重要なシチュエーションを提供する。そこは、喧嘩した二人が仲直りし、反抗的な子供が素直になる、要するに人が人との関係を取りもどす場である。そしてそれは、家内から路地空間への境界にある共的空間なのだ。



図2 居間のカーペットの上に広げた室内用洗濯干し（ベルリン集合住宅）